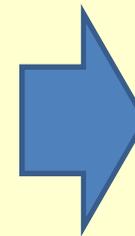
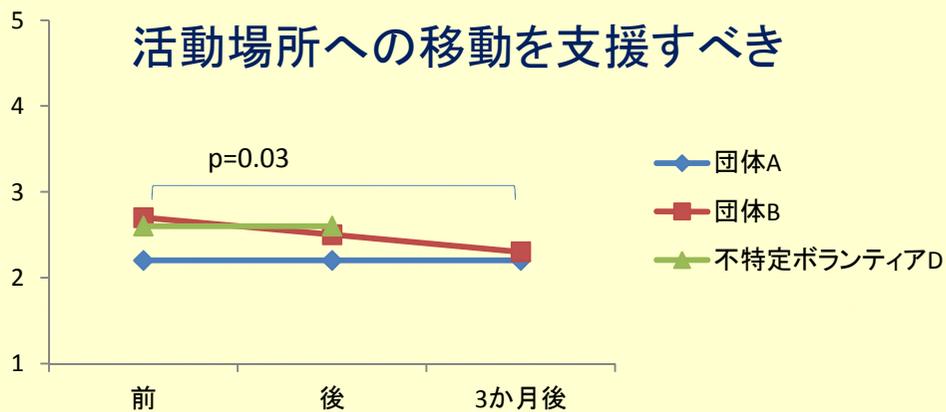
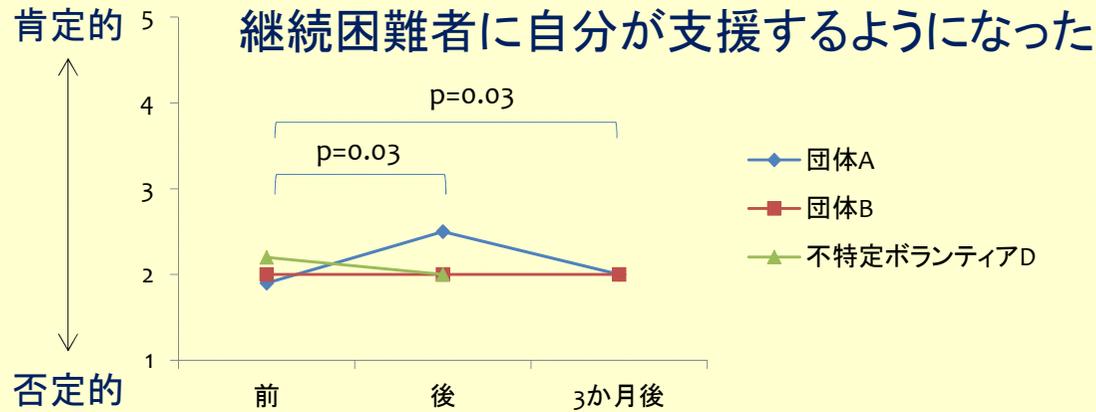
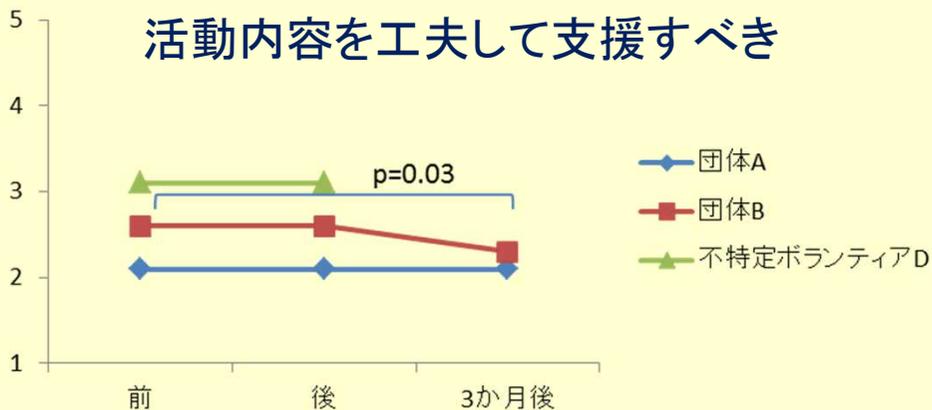


# (4) 研修前後の変化



不変もしくは、  
否定的に変化した。



## (5) 研修後のインタビュー

### ①被支援者の視点による研修評価

80代ボランティア4名

- 「他の会員からの慰留などの声掛けは望まない」。  
その理由、他の会員へ迷惑をかける。衰えた姿を他者に「晒したくない」。
- ボランティア団体・グループとは、一定の責任と任務の遂行のために個々人が自由意思で集った団体であり、他者の健康状態などのプライバシーに立ち入って付き合うことは団体の運営上、好ましくない。

### ②支援者の視点による研修評価

団体A:

- 会員間の相互支援を配慮したコミュニケーションの意識づけに一定の影響を与えた。
- 研修は、活動開始時から継続的に実施すべき。

団体B:

- 個々では、支援しているが、限界がある。
- 継続困難者自身が現状認識していない場合が困難。
- 実践事例の検討が必要。

不特定ボランティアD:

- 継続困難者は自然に引退しているため、イメージが湧きにくい。
- 継続困難者による負担ばかりが先行する。

## (6) 考察

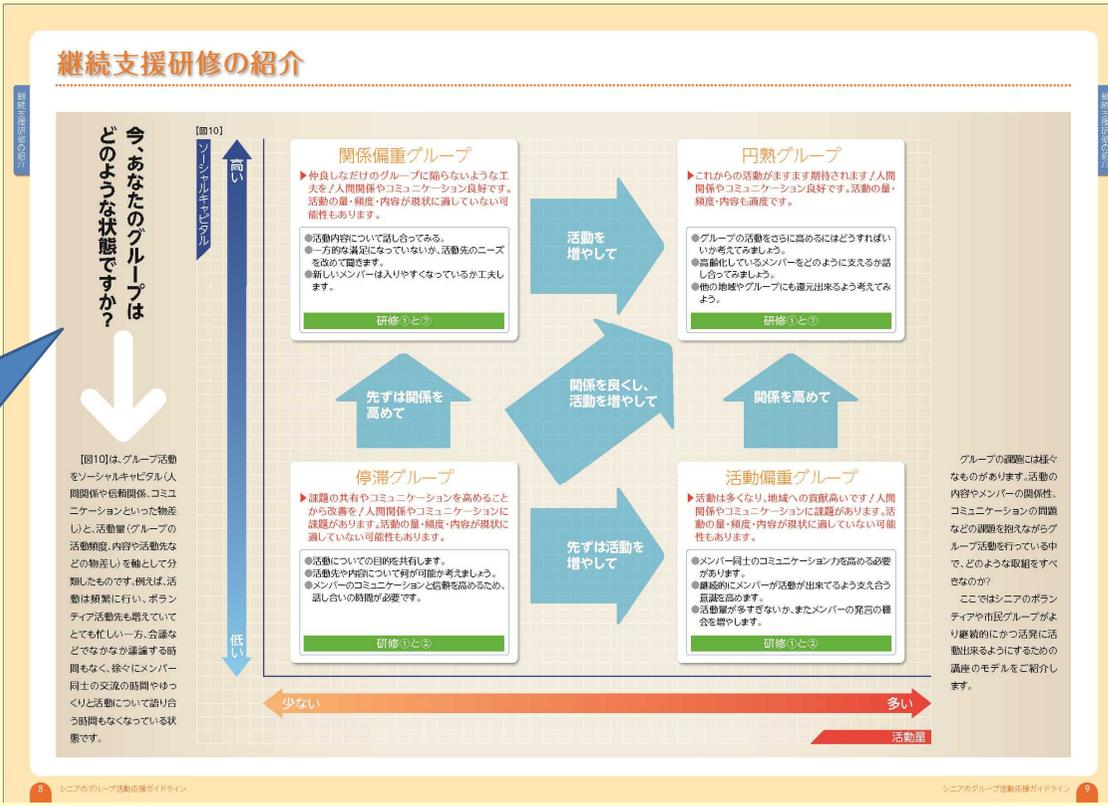
- 同一プログラムに参加するボランティアであっても、活動地域により活動継続意志や会員間の支援・被支援意志に差がある。  
→ 個々人の問題のみではなく、ソーシャルキャピタル (社会関係資本) の影響か。
- 
- 不特定ボランティアD群では、継続困難者は問題にすらならない。  
→ 活動の歴史が浅い、継続的活動が重要でない団体の場合。
  - 短期間の集中研修プログラムでは、高齢者ボランティアの継続支援・被支援意志は変化しにくい。むしろ課題を浮き彫りにした可能性。
    - ① ボランティアは機能集団？ vs. 友愛集団？
    - ② 高齢者間に根付くエイジズム (高齢者差別)
    - シニアボランティアのみの相互支援には限界があるのでは？

# (7) 成果物



- ## 目次
- 高齢者の社会参加活動
  - 高齢者のグループ活動の現状と課題
  - 継続支援研修の紹介
  - シニアのグループ活動を応援する研修アイデア
  - シニアの継続的なグループ活動のポイント
  - これからのグループ活動に必要な社会の仕組み

グループの今の状態をタイプ別に分けて、どのような研修や改善ポイントがあるか提示。



## 今後の展望～人生100年時代の社会参加・生涯学習に向けて

➤しかしながら、**継続支援はやはり重要**

→①本人のため(健康・閉じこもり予防)②受け手のため

→高齢者自身への研修プログラムの再構築の必要性  
(老いの受容、事例検討等)

➤シニアボランティアのみの相互支援に限界があるのでは

→継続支援を担う、コーディネーターや専門ボランティア  
(お出かけ介助等)が必要

➤次の(難易度の低い)活動へ移行できるか？

→地域資源についての情報の一元化と

社会参加支援コーディネーターの必要性

